

追悼

池中一裕先生を偲んで

(東京薬科大学薬学部) 馬場 広子

池中一裕先生は、大阪大学理学部をご卒業後、同大学理学研究科前期・後期課程を修了し、理学博士の学位を授与されました。大阪大学蛋白質研究所の助手、同助教授を経て、平成4年に岡崎国立共同研究機構（現自然科学研究機構）生理学研究所生体情報研究系教授に就任されました。その後平成30年3月同研究所を退職されるまで、神経化学分野において数多くの業績を残されています。池中先生という「グリア研究」あるいは「糖タンパク質糖鎖解析」というキーワードが思い浮かびますが、もともとは理学部化学科のご出身で、大学院博士課程では生物化学専攻に入学し、抗癌剤の研究に従事されたと聞いています。さらに2年間の米国ニューヨーク州立大学ストーニーブルク校留学中には大腸菌の遺伝子発現制御機構に関する研究に従事され、帰国後御子柴先生のもとで新たに神経科学の研究を始められたことから、有機化学、がん、分子生物学、神経科学と非常に幅広い研究基盤を持った研究者でした。特に御子柴研時代から取り組んでこられたグリア研究に関しては、多くの業績を残しただけで



池中一裕先生

なく、新学術領域研究「グリアアセンブリによる脳機能発現の制御と病態」の領域代表者としてこの分野の研究者コミュニティの発展にも寄与されたことをご存知の方は多いと思います。また、「ヤンググリア」など、若手研究者の国際共同研究の促進にも力を注がれました。

本学会には昭和61年9月1日に入会され、各種委員会活動の他に理事（平成11年～27年まで3期）の任期中に計10年間庶務担当理事や副理事長を務め、同24年には大会長として第55回大会（神戸）を開催されました。また、帰国子女としての本領を発揮してアジア太平洋神経化学会（Asian Pacific Society for Neurochemistry：APSN）ではCouncil（平成16～24年）、President（平成18～22年）としてアジア太平洋地域の神経化学の発展にも貢献されました。さらに、国際神経化学会（International Society for Neurochemistry：ISN）では、Council（平成15～19年）、Treasurer（平成25～29年）、そして平成29年からは国内の研究者としては日本人として初のPresidentを務めるなど、国際的にも人望が厚い方でした。多くの英文雑誌の編集委員も務められましたが、そのうちの一つ Neurochemical Research で平成30年1月に池中先生の特集号が出版されていますので是非ご覧ください。今回使用した写真は、特



先生お気に入りの1枚

集号の巻頭用に先生ご自身が選ばれたものです (Baba, Yoneda. Special Issue Dedicated to Dr. Kazuhiro Ikenaka. Neurochem Res. 43: 1-2, 2018)。

生理学研究所を退職された後故郷の堺市に戻られましたが、ご病気のため平成30年10月27日に逝去されました。

以下、神経化学に携わる研究者の多い私たち池中研同窓生の思いを込めて先生のご葬儀で述べさせていただいた弔辞を掲載させていただきます。

生理学研究所池中研同窓会の一員として、謹んで池中先生に感謝の言葉を申し上げます。

先生、アメリカの留学先から生理研神経情報部門に助手として迎えていただいてから、早いものでもうすぐ四半世紀になります。あの頃の池中研は、先生を含めて皆若く、臨床や企業からも多くの研究者が来ていて活気にあふれていました。普段は一日中実験する毎日でしたが、お正月には樽酒をあげ、春の花

見、夏のテニス、冬のスキーとまさに「良く学び、良く遊ぶ」という先生のご性格がそのまま反映されたラボでした。あの4年間は、私の一生の財産となっています。あれからメンバーも変わりましたが、いつも私たちの将来を気遣い、研究だけでなく様々なことを教えてくださるといふ、ラボのメンバーに対する先生のスタンスは常に同じだったと思います。おかげさまで、先生のラボで院生生活を過ごした者、ポスドクあるいは有職者だった者、そして秘書や技術者として忙しい先生のお仕事を支えてきた者たち、みな、今は自分の居場所を見つけ、がんばっております。

先生には研究の他にも多くの大切なことを教えていただきました。常にフェアであること、人とのつながりを大切にすること、若者を育てること、世界を相手にすること。私もあと数年で次の世代にバトンを渡すことになった今、果たしてどれだけの先生の教えを引き継ぐことができたのかと自問する毎日です。

先生、先生が力を注いだグリア研究は、科研費の基盤B獲得以来、特定領域、新学術領域へと見事に引き継がれて発展し、今では神経科学を代表する領域の一つとなりましたね。これからも同窓生を含め、多くの若い先生方がこの領域を引き継いで発展させていくことと思います。

一昨日以来、私のメールには、国際神経化学会やミエリンググループのメンバーなど世界中から先生のご逝去を悼むとともにご家族を気遣うメールが届いています。これも多くの国外研究者と共同研究や学会で交流される中で、研究以外の面でもご家族ぐるみの暖かなお付き合いをされてこられたからと思います。

先生、私たちは今、どうしようもない喪失感を感じております。でも、先生に教えていただいたことを胸に、これからもがんばっていこうと思います。ですから、これからもどうぞ見守っててください。でも、その前に、まずは荷物を下ろしてゆっくりとおやすみください。気にされていたお仕事も、皆で助け合いながらしっかりと引き継いでいきますので、どうぞご安心ください。

先生、これまで本当にありがとうございました。同窓生一同、深く、深く御礼申し上げます。

平成30年10月29日

池中研同窓生・東京薬科大学

馬場広子